しんらばんしょう
全面教育学研究会通信
2011.3.1　No.5

《２月例会報告》

コトワザの構造化

「認識」の奥深さをコトワザから探る試み
そして、コトワザを意味として捉えるのではなく、
発生から探り、ことわざを生んだ人々の文化的豊かさに触れる。

「苦しいときの神頼み」の発生

庄司　和晃

小惑星探査機「はやぶさ」を打ち上げた技術者は、惑星の帰還の無事を祈り飛行神社、電波神社(以上京都)、飛不動(東京)などに願掛けをした、という興味深いエピソードを交えて「苦しいときの神頼み」の話が始まった。

我々が日常でコトワザを操るのは、該当する事象が現れたとき、言葉として発したり文章で表現する、あるいは学校の授業で意味を教える、使い方を教えるという場合が多い。

今回、庄司先生から出された論文は、なぜそのコトワザが生まれたのか、という背景を探ることから始まり、コトワザを構造化する試みの紹介であった。それは従来の意味重視、使い方重視という場面から更に深まり、「裏の意味」を自ら探る試みとして、認識論に繋がる重要な意味を持っていると思われる。

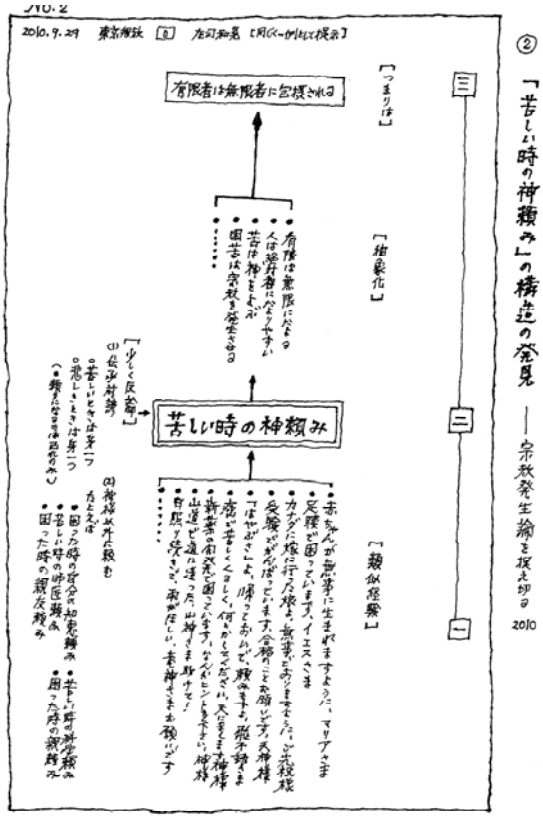
「裏の意味」とは、概念化のことで、認識の一連の流れ最終地点に立脚している。(→のぼりの流れから）つまり、人々はなぜこのコトワザを生み、またこのコトワザを伝えてきたのか、その人間のいきざまを探るという試みなのだ。

今回、庄司先生から提示された「苦しいときの神頼み」というコトワザには２つの意味構造が紹介されている。それは、「人間の勝手さを見る」という側面と「宗教発生論を捉えきる」という視点だ。

庄司先生に『科学ばっかり主義の克服』(1986,明治図書)という著作があるが、科学も人間が生み出したもので、それはある一面の真理でしかない､という捉えだった。この一面という見方が重要で、そこには科学も非科学も人間の認識として弁証法的に存在するという大きな捉えがある。

最先端をほこる「はやぶさ」の技術者が神頼みをするという行為は、科学者が非科学の世界を意識しているという点で、興味深い。そのことを思いつくとき、「苦しいときの神頼み」というコトワザは、このコトワザの生んだ無名の人々のもつ文化的奥深さに気付かずにはいられない。そこには宗教の発生が感じられるからだ。

このコトワザ以外にも、「行動は結果する」が「犬も歩けば棒に当たる」につながり、「花より団子」が「美より利」という概念につながっていくという構造が紹介さ



れた。庄司先生は、具体的に看護学校でこの授業を展開している。ここでどのような作品が生まれたのかは次回の研究会で紹介されるということであった。乞うご期待である。

今をどう切り抜けるか

数理統一学と認識論…

今井 誠

残念ながら今回の今井さんのレポートは認識論のレポートというようには読めない。それは、「認識」とか「弁証法」という言葉そのものを数値化するという占星術のような内容をはらんでいるからだ。

認識は、ニンシキという語列や音声ではなく意味を内包する概念である。その言葉を機械的に数値化するという手法は、認識論や弁証法あるいはことわざ研究に相容れないものであるからだ。庄司先生の『人はなぜオカルトに魅かれるのか』にもあるように、宗教は人間の歴史の中で長い間醸成された精神性をはらむものである。数理統一学というものが科学なのか宗教なのかはよく分からないが、行き先が今井さんの土地購入の損得に関わることであるならば、自分だけが利益を得て他の人が利益を得ないという状況が見て取れる。それでは宗教になり得ないだろう。また、我々の研究する認識論も損得の利害を問題にしているのではなく、互いの考え方や生き方の方法を論じているのである。

当日私が述べたように、「最大多数の最大幸福」というベンサムやミルの理論から現在の福祉社会が成り立っているという前提があるが、この数理法はそれとも相容れないのではないかと思われるのである。

繰り返し、繰り返し

今沢 正史

地デジ対応のソニーのＴＶからスイッチを入れると常にロゴがでるという“発見”から発想した例によってシュール（？）なエッセーです。ソニーのＴＶから発案した「繰り返しの効果」を長年ともにしてきている奥さんに(現在は敵という認識らしいのですが)「敵から学べ」といって、「ひねくれ反対」を繰り返す様は、あまりにも唐突で状況がつかめません。繰り返しの効果を試すよりも、今沢さん、奥さんの気持を察したほうがいいと思います。だって奥さんを怒らせてしまっているからです。

今沢さん、奥さんはあなたの術中にはまったのではないと思いますよ。多分。

繰り返しを繰り返し多用しているこの文章ですが、コトワザの引用が必ずしも繰り返しの意味となっていないようです。繰り返しますが、繰り返しは残念がら「のぼり」

「おり」にもなっていません。なっていれば、ちょっとすごい発見でしたが。

認識における制約と拡張

向井 吉人

時間がない会の終了時に紹介された向井さんの論文は重要な視点を捉えている。我々はフツーに「認識」にたどり着くように思えるがそう簡単にはいかないということに気づかせてくれる。五感でぼんやりと把握していることも広義の認識にふくまれるのだ。そういう意味では認識の相対化の試みともいえる。この論を読むと、認識は素直な筋道だけではない。小田さんだけが見つけた登さんの指輪。見えているけど見えてないものをウスぼんやり認識と定義するのも頷ける。本来の認識とは意識化したものであるだろう。そういう意味で主観的に見る事の重要性に気づかせてくれる一文である。

ＮＰＯ法人 Small School Chingen の紹介

武田 恭宗

成城学園を退職した武田さんがＮＰＯ法人を立ち上げ「生きる力を身につけさせる」というコンセプトで行ってきた様々なワークショップの様子をパンフレットで紹介してくれた。

主たる活動内容は、子供のための野外学習を中心とした教育プロジェクト、保護者のための教育相談や教養講座、そして教師のための教育プロジェクト、更にコンサートも盛り込まれている。興味や関心のある方はぜひご連絡を。

◆ NPO 法人 SSC スモールスクールちんげん事務局 ℡ 03-3300-9099
Mail: sschingen@googlegroups.com

「ことわざに聞く」発刊

庄司先生の論文「コトワザ教育の体系つくり――思考発展論からのアプローチ」が掲載されてる『ことわざに聞く』（人間の科学社 2010.11 1600 円）が出版され研究会でも紹介されました。本会報の１～２ページで紹介した「コトワザの構造化」が詳細に紹介されていますのでぜひご一読を。

小田さんのホームページ見ましたか

未曾有の震災に見舞われた東北地方ですが、みなさんのご家族や親戚、知り合いの方は大丈夫だったでしょうか。遠野は震災支援の前線基地である、と小田さんは新しく立ち上げたホームページで紹介しています。３０００食の味噌汁の元も送ったとのことでした。みなさんもぜひご覧下さい。
アドレス紹介 http://www.people.co.jp/oda/

「２０１０年報」完成

今年も向井さんの編集によってみごと完成しました。１冊６００円です。必要な方は向井さんへ一報を。

【例会のお知らせ】

日時：４月 ２日(土)１４：００～１７：００
場所：成城学園 正門脇 案内所建物 3F
別室にて（２５周年記念集会棟）
連絡は徳永まで 090-8721-5517
内容：年報の読み合わせ

復刻　庄司和晃著作

今日への示唆をくみ取る

すでに見てきたように、柳田は自分自身の児童観に基づいて、前代児童の生活と文化とをかれなりにほりあげて、それを私どもに提供してくれた。

集約していうと、前代の子どもには社会的な役割があった。主としてその役割は年中行事の節句や祭りの時に発揮された。それは前代人の依代的児童観によって裏打ちされていた。子どもは神の身代わりという信仰に支えられていたわけだ。そのために前代の大人は、めでたいことはつとめて子どもの口から聞こうとした。このように子どもの役目が社会的にはっきりとしていたわけである。柳田は「日本は昔から、児童が神に愛せられる国でありました。」と『日本の伝説』(伝説と児童」の項)の中でもいっている。彼はある意味で前代人の陽性面をほりとったといってよいだろう。異常時や非常時よりも平常時により深くかかわっての研究活動であり立言であった。常民の名が示すとおりだ。

前代児童集団の自治的性格と大人の不干渉ということ。この方は、さまざまの示唆を今日になげかけているように思う。「桃太郎の誕生」(三の項)には「子どもの遊びは本来は自治であった」と説かれてもいる。それをも念頭に置いて、今、心に去来するところの二・三をつぎに書きつらねてみよう。

今日、子どもをいじりすぎてはいないだろうか。大人側の干渉が多すぎるように思う。大人が子どもの心のすみずみまではいりすぎている、ないしははいりこまんとしている。上手な管理体制をそこに敷こうとするような気配がみられる。これではよくないのではないか。子どもはそれほどに能力がないのであろうか。そうではあるまい。もっと自由を保障する手だてがないものか。

かつて亀井勝一郎が「教育とは自己の夢を、生きた若い命の上に描く行為だ」(『二十世紀日本の理想像』第五章)といったことがあるが、今日は、少し描きすぎではないかと思う。大人の夢を押しつけすぎているようにも思える。自主性や主体性のようなものまでこちらから何とかしようというのであるから、ある意味では大変な干渉である。善意のいきすぎは子どもを駄目にする。「それは恐ろしい行為だ」(同)。…

学校教育は教育全体から見れば一つの特殊形態にすぎないのに、あまりにも威力を発揮したが故に学校教育にあらずんば教育にあらずというほどまでになった。これは変則的なことではなかろうか。そろそろ反省すべきときにさしかかっているのではないか。今は新たなる習俗づくり、その過渡期にあるといってよいであろう。時間は、ずんとかけたいものだ。

(『柳田民俗学の子供観』明治図書選書14　1979.9)